

春の歌

— その一 —

曾 根 保

私の病室には櫻^{ブルムローズ}草が微笑^{ほ、え}んでゐる。去年の暮見舞に頂戴した鉢植だが、少しの衰へも見せず咲いてゐる。外には雪のやうに眞白い霜の降りた酷寒^{あした}の朝にも、暖い微笑を以て私を迎へて呉れたのはこの櫻草だつた。ふくよかで、混り氣の無い濃い綠葉、柔い桃色の花瓣はいさしい少女の感じである。淡い陽ざしに息づいてゐる可憐な姿——氣づつたところの少しも無いこの花を、私は二ヶ月以上も朝夕の友として暮して來た。こんなに永く私の側に居た花が今迄にあつたであらうか。私はこの花を見てゐるを、たゞ自らの生命を樂しんでゐるのださいふ感じを受けない、何かしら深く結ばれるものがあつて、この病人の爲に、靜かに辛抱強く座つてゐるをしか考へられない。折々に机の上を飾る草花も、例へば強い香りをもつ端麗な白百合にしろ、色ミ

ぎりの菊の花にしろ、一週間も経つゝ飽いて來るものなのに、この櫻草に對しては、今迄につひぞ覺えたことの無い愛を、そして又感謝を捧げたい氣持になつてしまつた。まだ恢復しきらない私は寒い外氣を恐れてゐるが、一本^{ひたひた}の可憐な草花が力強く次々に蕾をつけて生きて行くのをみるに、自分の肉體の弱さを嘲りたくなり、「これでは駄目だ」——奮ひ起つ氣持が湧いて來る。家の年寄が「今日は立春ですよ」——言つたのは、もう一週間も前のことだ。永らく閉ぢ籠つてゐた私も、早く春の光を存分に浴びてみたい。こんな願ひが心に湧いて來たのも、自分には不思議に思はれる。

「春」云ふに、私は直ぐ島崎藤村先生の言葉を想ひ出す。「春さしい言葉も、單に季節の感じに過ぎなかつたが、私の

歩いてゐた寂しい道に、漸く夜の明けたやうな氣持がした時、あの『若菜集』の「春」が出来た。これは私の思ひつきではなく、北村透谷の如きも同じ考へであつた。このお話をうかゞつてからは、先生の詩を讀む時、春といふ言葉が特別に目立つて來、又これまで漠然と、不用意に使つてゐたこの言葉に私は妙に別の意味を感じるやうになつた。「詩を作るこゝは、言葉を新しくするこゝだ」^{こゝ}といふのが藤村先生の詩作の出發點であつた。「言葉は繰り返されるうちに磨りへらされてしまふ。言葉に新しい意味を與へ、又新しい意味に置き代へるこゝ」が詩人の仕事である。明治四十一年の春から『東京朝日』紙上に連載された「春」^{こゝ}といふ小説の切抜に、私が法外の金を投じて客まなかつたのは、先生の「春」^{こゝ}といふ言葉に對する感覺に驚き、且つ感激したからであつた。この切抜本の扉にはかつての所有者が『落梅集』から、

ふみ目は覺めぬ

五ミセの

心の醉に驚きて

若きこの身を

ながむれば

はや吾春は
老いにけり

の一節を書き記してゐるのもゆかしい。尙、名取春仙畫伯の插繪が私には嬉しいのミ、百三十五回を最後に「春」が完結して、そのあゝに次回小説「三四郎」(九月一日より掲載)の豫告があつて、作者漱石の言葉が又愉快である。興味ある一文ミ思ふから、序に豫告全文をこゝに掲げて置かう。變な標題だミ思つて、乍座^{ざん}な小説ですミ訊くミ作者曰く『田舎の高等學校を卒業して東京の大學に這入つた三四郎が新しい空氣に觸れる、さうして同輩だの先輩だの若い女だのに接觸して色々に動いて來る、手間は此空氣のうちに是等の人間を放す丈である、あゝは人間が勝手に泳いで、自ら波瀾が出来るだらうと思ふ、さうかうしてゐるうちに讀者も作者も此空氣にかぶれて是等の人間を知る様になる事ミ信する、もしかぶれ甲斐のない空氣で、知り榮のない人間であつたら御互に不運ミ諦めるより仕方がない。たゞ尋常である、摩訶不思議は書けない』。

さて、春の歌は、「かたまりに鞭うつ梅の主人かな」(蘇村)あたりから始めて、桃、櫻、季節を逐ふのが順序かもしれないが、俳句や短歌は私の柄でもなく、こゝでは勿論英詩に限るこゝになつてゐるのだから、回を逐ふて英詩の春の歌を拾ひ上げてゆかう。だが、今これを書いてゐて、「草あはく青める野べに今日もきてしきりに春の流るゝを見ぬ」ミ歌つた自然ミ愛の歌人、金子薫園氏に春を描いた文章のあるこゝを想ひ出した。氏の春は四月の春である。

「はかない小草の末までも細かい花をつけて、融けるやうに春の陽に煙つてゐる。誰の顔を見ても、のんびりミ平和さうに見える。しかも平和な動搖さもないふべきものが、その中に起つて来る。それは咲満ちてゐる花に風があつて、うすう揺りうごかすやうな軽さである。……郊外に出て春草を踏む心持には特殊の味がある。夕ぐれなぎに草原を歩いて、濕つてゐるやうな柔さが、履物の裏に覚え、又爪尖に感じられる時、身内にしみわたつて来る心持は懐かしい寂しみである。一步又一步夕ぐれの氣がだんだん迫つて来る時、ひこりさいふ感じに伴なふ慰なぐさ

安やすみを覚えしめる。身のまはりに誰一人ゐない。たゞ若草ミ自分ばかりである。懐かしい寂しきは、聲を放つて泣かしめるばかりである。……」

まだ早春の或る寒い朝、私は亡き母を想ひ出し、急に紙片に書きつけたくなつて書きこめた拙文がある。題して『寒い朝、亡き母を想ふ』ミいふのである。何のために書いたミ訊かれても返答は出来ない。たゞ、知らぬうちに書いてしまつたミ答へるだけである。

「このやうな冷たい朝でした。お加減が悪かつたのか、お母さんは、時折濟まないが起きて、お粥をこしらへて下さらない」ミお仰言るのでした。私は新聞紙をちぎつて、くしやくしやに丸め、消し炭をその上に載せて、強く團扇であほり立てゝ火をおこしました。そして、お芋の皮をむくのですが、手に白い芋汁がつくのには閉口でした。皮をさるミ、左の掌に白いお芋をのせ、右手にもつた庖丁でボキン、ボキンミ切つて鍋の中へ落します。お鹽を入れるのを忘れた時なき、お鹽の有難さがよくわ

かりました。お鹽は物を辛くもするものなのですが、又同時に甘くもするものだといふことを知りました。お母さんは「濟みませんでした」を仰言つて、私のこしらへた妙なお粥を食べて下さいました。その頃親子二人は狭い狭い、やつと身を入れるだけのお部屋に往んでゐましたが、神様に感謝して、有難くお粥を頂戴しました。漬物さへ無いこともありましたが、本當に毎日満足して、未來の希望の光に導かれて暮しました。二人が雨露を凌いでゐたこのお部屋は大きなお庄屋さんのお家の一隅でした。お庄屋さんの家には嚴めしい背の高い「おちさま」を優しい小柄の「おばさま」が、婚期を逸した、よく肥えた「お姉さま」——始終さう呼んでゐたので、今そのお名前を想ひ出せませんが、とても優しいお姉様でした——そして、氣の狂つたお兄様がゐられました。「氣狂ひさん」は私達の狭いお部屋を時に襲つて持物を荒すので閉口しました。しかし當時の私達には支那靴が一つ、柳行李が三つ四つ、さういふ位の財産しか無かつたのですから、いくら、ひつ搔きまはしても、中からは別段氣狂ひさんのお

氣に召すもの——お金でしたが——は出て來ることはありません。でも、相手が何しろ氣狂ひなのでさうにもなりませんでした。龍華寺前の谷川を堰き止めるのだと言つて、毎朝毎晩大石小石をかかえて行つては投げ込むのです。町の人も全くもて餘してゐました。いつか春の遠足の前日のことです。私が三角のお握りを焼いてゐますと、氣狂ひさんが入口をうろうろするのです。私は入口の脇に掛けてあつたお母さんの着物の中にそつと身をひそめてゐますと、氣狂ひさん、忍び足でお握りをめがけてやつて來ました。もう一步で獲物を手に入れるといふ際ぎい瞬間、私は飛びかゝつて、いやさといふ程、背をぶつてやりました。本當に吃驚したらしいのです。「かんにんして下さいよ、かんにんして下さいよ」と泣き聲を出して逃げて行きました。私が中學二年生の頃の事です。その頃私はたゞお母さんの温い胸に抱かれて、極めて柔順に、平和な日を過してゐました。日曜學校のお手傳をして、幼い人達に『ダビデミゴリアテ』の話をしたり、『彦作の隠れ蓑』なき、お伽噺をしたりしたのを想ひ出します。

教會の鐘を撞くのは大抵私の仕事とされてゐました。東京にゐて、夕方など、ニコライのあの華やかな鐘の音を聞く時、そゞろに宇和島の教會の鐘を想ひ浮べます。又鐘のない教會に行く事もありますが、鐘のない教會ほど私にさびしいものはありません。……お母さんが亡くなられてもう二年になります。何一つ思ふこともして差上げず、永の別れになつてしまひました。……今はもう寒い日も過ぎて春らしくなりました。春は春で、お母さんと一緒に妙典寺前の田圃で摘草をしたこともあります。私はお母さんの行かれるころへは影のやうについてまはりました。父を早く失くした私には、お母さんがこの世で一番貴い偉いお方でした。學問でも人格でも、お母さんほどの人は未だ曾て見たことがありません。『前赤壁賦』など、私はお母さんから教へていただいたのです。私が何處にゐても、何をしてゐても、お母さんの御靈がちゃんと私を守護して下さることを信じてゐます。寒い日も過ぎました。春草の香ひが懐しく思はれます。私はお母さんの御姿を毎日探し求めてゐます」。

私の想像は急に昔に飛んで行き、想ひ出は、それからそれへに際限も無く擴がつて行く。しかし私は筆を元にかへさなければならぬ。

春を詠んだ英詩は、その數も可成り多いことだらうと思ふ。大抵のアンソロジーの冒頭を飾つてゐるトマス・ナッシュの有名な春の歌が直ぐ想ひ出されるのであるが、それは後にゆづり、今は十九世紀に於てテニスンと並び稱せられたロバート・ブラウニングの『ビバの歌』を考へてみることにする。

The year's at the spring
And day's at the noon;
Morning's at seven;
The hill-side's dew-pearled;
The lark's on the wing;
The snail's on the thorn:
God's in his heaven
All's right with the world!

この詩は單獨の作ではなく、劇詩 *Pippa Passes* の中の主人公ビバといふ女工の歌ふ歌である。従つて詩の標題はないが、普通『ビバの歌』と稱せられて

ゐる。わが國では上田敏氏の譯があり、これが名譯の評判

高く、よく引用されるので廣く一般に知れ渡つてゐる。福

原麟太郎氏は『英文學の輪廓』に「著書の中で、

「何が名譯だと言つても、上田敏氏のブラウニングが『ピ
パのうた』(Pippa's Song)の譯

時は春

日は朝(あした)

朝は七時

片岡に露みちて

揚雲雀なのりいで

蝸牛枝に這ひ

神そらにしろしめす

すべて世は事もなし

に優るものはなからう」。言つて、土居光知氏の批評を引
用してゐられるが、土居氏の『文學序説』を繕いてみると、

「譯詩としてこれ以上に原作の面影を傳へることは至
難である。しかし原詩に於いては始めより終りまで二脚
音行よりなり、少女の朝のさわやかな感興が直接に與へ
られるのであるが、譯詩に於いて五音節を重ねた行から
稍々客觀的な敘述になり少しく直接さが失はれてゐるの

ではあるまいか」。

さある。私は原詩の鑑賞にはいる前に、この短詩にさへ色
色の譯しふりがあつて、詩の翻譯のむづかしさを披露して
みたい。先づ古いころでは『宗教と文藝』といふ雜誌に載
つた、植村正久氏の譯

年は春、日は朝、朝は七時、山腹は眞珠なす露ぞ濡
ふ、雲雀は飛び立ちぬ、蝸牛は茨が上に在り。神其
の天に在り——世界はすべて是なり。

同じく宗教界の重鎮であつた内村鑑三氏の譯

年は春なり

日は朝なり

朝は七時なり

山側は露に輝き

雲雀は空に舞ひ

蝸牛は叢林に戯る

神は天に在り

此世の萬事可なり

前第三高等學校教授栗原基氏の譯

時は春

日はあした

朝は七時

丘に露の珠

雲雀飛び

蝸牛は茨に

神は天に

世は平和

早稲田大學教授であつた横山有策氏の譯

時は春

日は朝

朝は七時

山腹は露の玉

雲雀翼をひろげ

蝸牛はいばらに

神天にゐます

此世の事皆正し

同じく早稲田大學の教授帆足一郎氏の譯

年は春の日、日は朝日

朝は明け六つ、山陰は

露の眞珠を懸けたやう

雲雀は空に、蝸牛は

茨に棲まり、神様は

天に在し——萬物は

けにも正しく世を渡る

最後に、中川竹太郎さいふ人の譯

年は春、而して日は朝、朝は七時

丘の麓に露の玉は麗らに輝き

雲雀は高く飛び、蝸牛は角を出し

神は天にあり凡ての物は世界を調和せり

以上七種の翻譯より、及びその巧拙は、この詩の解説を御覧になつた上で試みられ、ば相當面白いことではないかと思ふ。

(つづく)